

顧問の斎藤佐智子さん死去



斎藤佐智子さん

長らく闘病生活を続けておられた斎藤佐智子さんが8月31日に死去されました。89歳でした。

斎藤さんは、18歳で1949年に日本共産党に入党し、1960年・安保闘争の年に党の専従となり1990年まで30年間、県や中央の党役員として、女性初の県委員長になるなどの活動をしてきました。

1955年の世界母親大会では、岩手から小繫の土川マツエさんを送り出す活動、帰国後の東北各県での報告活動に取組みました。1962年の新日本婦人の会県本部の結成や婦人民主クラブ盛岡支部の活動に参加しました。

夫の竜雄さんは被爆者で県や中央の被団協＝被爆者団体協議会の事務局長でしたので、その活動を支えました。

同盟では、1991年に県本部の結成を準備し（当時は支部）副会長を続けてきましたが、病に倒れ顧問となりました。

戦前の女性の抵抗の歴史や母親大会のことなど、「不屈」岩手版にとり上げてきました。今年同盟は結成30周年を迎えたが、日本共产党の創立100周年を前に亡くなられた斎藤佐智子さんに心から哀悼の意を表します。

安らかにお眠りください。



発行所
治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟
〒113-0034東京都文京区
湯島2-4-2全労連会館
国賠同盟岩手県本部
〒020-0013盛岡市愛宕町
17-4 牛山清夫
T/F 019-623-8648

▼鶴彬の句碑と墓を訪ねよう
▼『新しき明日をめざして』の感想その6 久慈市・榎平茂雄さん、盛岡市・西山剛さん
▼歌集『わたしは生きる』の作者八坂スミさんとは
▼『新しき明日をめざして』はこうして誕生した 牛山靖夫 連載第7回

一寸一言

「スガ・アベ政治を許さない」総選挙へ
9月3日菅首相が自民党総裁選への不出馬を表明し、安倍前首相同様官時代に望月衣塑子記者の質問を封じた時の強権・冷酷無比な姿は見る影もなかつた。デジタル庁創設、温室効果ガスを50年までに実質ゼロなどを成果として挙げるばかりで、コロナ無策、日本学術会議の会員任命拒否、沖縄辺野古新基地建設の強行などあげればきりのない強権腐敗政治の総括はなく、総裁選をめぐるニュースばかりを垂れ流すマスコミに呆れる。一年前の政権発足時に74%と歴代3位の高支持率がもてはやされたが、最後は政権復活後の最低記録を更新した。今度こそ首のすげ替えに騙されではならない。スガ・アベ政権の9年間に政治がどれだけ劣化したことか！平気で嘘をつきまくり、まともに説明義務を果たさず、公文書は改ざんし、お友達には甘く国民には自助を押し付ける政治にきつぱりとピリオドを打たなくてはならない。総裁が誰になろうともこの悪政を支えてきた自公勢力では何も変わらない。

世界に誇る日本国憲法に基づき、戦争しない、核兵器禁止条約を批准し、人権を守る政権を選び取る総選挙が始まる。(D)

鶴彬の句碑と墓を訪ねよう

連載
『新しき明日をめざして』の感想

盛岡には反戦川柳人・鶴彬の句碑と墓があります。句碑「手

は本町通の光昭寺の山門脇にあります。墓は道向かいの墓地にあり、「鶴彬の墓」の石柱が建っています。



鶴彬は石川県の出身ですが
盛岡で染物屋をしていた兄の孝
雄が墓を建てました。

同盟では「鶴彬を語る盛岡の
会」をつくり、毎年「鶴彬のつ
どい」を墓前で開き、『盛岡歴
史散歩』で墓と句碑を案内して
います。まだ句碑や墓を訪ねたことのない会員は、是非一度訪
ねてみましょう。

鶴彬の代表句には、次の川柳があります
万歳とあげて行つた手を大陸において來た
高粱（こうりやん）の実りへ戦車と靴の鉢
屍のゐないニュース映画で勇ましい
出征の門標があつてがらんどうの小店
手と足をもいだ丸太にしてかへし
胎内の動き知るころ骨がつき

私は岩手を離れて18年たち、今年4月で仕事を辞め洋野町に帰つてきました。

P 73 「1928年(S3)2月普通選挙法による初の総選挙では労働農民党からは岩手2区から泉国三郎が立候補した。立候補には2000円の供託金が必要だつたが金がない。選挙長の横田忠夫は折から北海道へ向かう山本謙蔵と列車の中で交渉し、党本部から1000円を借りることができた。」とあるが、今年3月か4月に出版された「時代の証言者 伊藤千代子」

A black and white portrait of a young man with dark hair, wearing a dark, high-collared robe. He is looking slightly to his left. The background is dark and indistinct.

伊藤千代子

といふ本では、山本諱蔵も金が無く北海道に行くにも供託金がなく東京で足踏みをしていたが、その時伊藤千代子の実家から、千代子へ東京女子大学の学費が送られて来て、千代子の夫浅野が党へカンパしてくれと千代子に願い、千代子がカンパした事が書かれています。

この鳥千代子は東京女子大学卒業(びとくわがく)生(せい)で、

P 189 「1928年(S3年)2.20.男子普通選挙
法による最初の総選挙。労働農民党は19万票(2%)をえて
山本宣治ら2名が当選。無産政党8議席、政友217議席、民
政216議席。北海道で小林多喜二、長野で伊藤千代子が労働
農民党を支援。」

千代子は長野の学校卒業後、長野で教職にも立つがその後仙台の学校こ入学、さうこ東京こ出て東京女子大学こ入学してハ

(註) 千代子は労農党統一候補として諏訪・伊那地方で立候補した藤森成吉(プロレタリア作家)の演説を聞いたり投票に協力した支援を指すと思われます。(「不屈」編集子)

P 108 斎藤龍雄の生き方に感動しました。
P 81 盛岡消費組合でスペイ小畠達夫の果たした役割を初めで知る等、数多くのことを知りました。



野党連合政権

実現の糧に！

盛岡市
西山
岡

○「新しき明日をめざして」を

「新しき明日をめざして—治安維持法で弾圧された岩手の人びと」を読んで思うのは、この労作は戦前の無名戦士のたたかいの記録にとどまらず、今日のたたかいを前進させ野党連合政権を実現させるうえでも重要な糧になるものと思う。治安維持法は「国体変革」を唱える者に厳しい処罰を課した戦前の希代の悪法（逮捕者数十万人、送検75,681人）だが、戦前のたたかいを学ぶことは、現代に生きる我々にとって、今日のたたかいの教訓と展望を培う上で重要と思う。

戦前史は現代に通じている。今日の安部・菅政権は「戦前回

戦前史は現代に通じている。今日の安部・菅政権は一戦前回
帰めざす「ウルトラ右翼」の靖国派政
権だ。その起源も当然で安部前首相はA
級戦犯容疑者岸信介の孫というだけでな

352016年、戦前元内務官僚、鹿児島県特高課長、奈良県選出、日本会議代

表委員）と板垣正元参院議員（1924～2018年、戦前陸軍大臣でA級戦犯の板垣征四郎の次男、日本遺族会顧問、日本会議代表委員）であったと言われている。つまり特高と軍人から靖国史観と特高史観を徹底的に叩き込まれた政治家として育つたのが政権中枢を牛耳ってきた。菅政権も閣僚20人中18人が「靖国」派議員。選挙になれば自民党は必ずと言つていい程、治安維持法等被告事件を「宮本リンチ殺人事件」などと称して反共攻撃を仕掛けってきた。したがつて、戦前のたたかいを単に立ち向かう、現代のたたかいに生かす立場で学ぶ必要がある

「昔話」に対することなく、党綱領路線に確信をもつて反共攻撃と痛切に感じている。

○震災10年にあたつて

震災と弾圧の歴史から

今年は東日本大震災から10年、私は県党の救援復興事務局長として、被災地・被災者の救援活動や復興活動に携わってきた。党ボランティアは全国からのべ約5万人余、岩手県には約2万人（近畿、中国、北信越、青森、秋田など）が支援に来てくれた。救援募金は全国で10億円余、他党の10倍以上（ちなみに自民党は1億円程度）集め、直接被災地・被災者に届けてきた。「国民の苦難軽減」は立党の精神、改めてすごい事だと感じている。

支配勢力は救援活動そのものを敵視し弾圧の対象としてきた歴史があつたことを、この著作は教えている。

1923年9月1日の関東大震災（10万人犠牲）時の救援活動にあたつた川合義虎（共青初代委員長）らが官憲に逮捕・

○私と治安維持法犠牲者との関わりについて

①津川武一（1910～1988年、青森県旧浪岡町

生まれ、69年東北初の党代議士、以来通算5期）と

相沢良（1910～1936年、青森・旧浪岡町

生まれ、共青、全協で活動）について



（33年2月）野呂検挙（33年11月）宮本顕治検挙（33年12月）と弾圧は最高潮になつていく。

私は72年総選挙で津川再選のおり選挙闘争に参加し、津川武一の奮闘ぶりを目の当たりにした。彼は医師（津軽保健生協の創始者）・作家であり、心優しい政治家だった。彼は63年から県議2期を務め、69年衆院初当選後、飯場に出かけ出稼ぎ労働者と苦楽を共にしながら、「津軽のコメとりんご、出稼ぎ者を守る」信念の人だった。『青森の農林大臣』とも評された人だった。彼の優しい眼差しは今でも忘れない。

彼の生涯は、津軽の貧農に育ち、旧制弘前中学、旧制弘前高校、東京帝大医学部へと進む。帝大入学試験時（30年）『3・15恨みの日』というビラを受け取り、メーデーに参加、メーデー行進中に石原左源太からRS（読者会）に誘われ「空想から科学へ」「資本論」「貧乏物語」などを学習し急速に党に接近していく。『32年テーゼ』発表頃入党したと述べている。

RSの1年先輩に北上出身の斎藤龍雄（戦後岩手で党県委員長

や国政選などで奮闘、沢内、北上で医師、P108参照）がい

た。津川は「赤門戦士」（1千部）の編集にも携わる。また太宰治は旧制弘高時代の津川の同級生で戦後1945年の青森県

党再建時（委員長・津川）の集会に出席した（太宰は旧北郡木町の大地主の子弟）。

津川は32年入党直後逮捕され懲役2年執行猶予3年の刑を受け34年から兵役。熱海事件（32年10月）、多喜二虐殺



②柳館与吉（1913～1995年、元党県委員長、名誉

県委員、救援会・国賠同盟初代会長 P168参照）

柳館与吉さんは、私が専従かけだしの頃、よく民青会館に来て、いろんな話をしてくれた。一番印象に残っているのは、

「俺は共産党のおかげで命を救われた」という一言だった。そのわけは、のちに出版された彼の自著『ネグロス島脱走記』に記されている。彼は33年7月「消費組合事件」で検挙され1

月まで拘留された。岩手県における最後の治安維持法事件となつた。彼はその後、様々な職につき、44年教育召集で兵役、45年5月フィリピン・ネグロス島で部隊は玉碎、飢餓状態のなかで脱走を決行し、米軍の捕虜となり、収容所生活を経て同年12月に復員、翌46年日本

共産党に入党し党役員になる。「命を救われた」理由は「旧制中学の頃から社会科学を学んだことが脱走決行の原動力だった」というようなな



龟戸事件犠牲者の碑

1933年（昭和8年）3月3日の昭和三陸大津波で多大な犠牲が出た時も、書で記されている（P24参照）。

田原出身）も犠牲になった

一人であつたことがこの著

てこの時、川合と同じ南葛労

勵会の佐藤欽次（江刺

参考）。

1933年（昭和8年）3月3日の昭和三陸大津波で多大な犠牲が出た時も、書で記されている（P24参照）。

田原出身）も犠牲になつた

一人であつたことがこの著

てこの時、川合と同じ南葛労

勵会の佐藤欽次（江刺

参考）。

1933年（昭和8年）3月3日の昭和三陸大津波で多大な犠牲が出た時も、書で記されている（P24参照）。

田原出身）も犠牲になつた

一人であつたことがこの著

てこの時、川合と同じ南葛労

勵会の佐藤欽次（江刺

参考）。

1933年（昭和8年）3月3日の昭和三陸大津波で多大な犠牲が出た時も、書で記されている（P24参照）。

田原出身）も犠牲になつた

一人であつたことがこの著

てこの時、川合と同じ南葛労

勵会の佐藤欽次（江刺

参考）。

『労農救援会』はただちに活動、当時、東京大崎診療所（民医連発祥の地）の看護婦だった砂間秋子（夫は砂間一良元幹部会委員・戦後衆院議員）ら3人が田老村（現宮古市）で救援活動をはじめてわずか3時間後に逮捕・弾圧される。

今日、救援活動は

弾圧されることではなくなつた。そればかりか、私たちの運動と活動が政治を動かし、県政与党となり、被災者医療費等の無料化は10年経過しても被災地では岩手県だけが継続しているという立派な実績もつくついている。

三陸罹災地に三百餘名の大衆的検挙三陸救済委員会結成

（33年2月）野呂検挙（33年11月）宮本顕治検挙（33年12月）と弾圧は最高潮になつていく。

相沢良は津川と同世代・同郷の人。治安維持法下でのたたかいでは、伊藤千代子、高島満兎、田中サガヨ、飯島喜美らと遙色ない活躍をした人物、治安維持法犠牲者で若くして倒れた。

相沢良の指導を受けた1人に戦後北海道から46年初の党女性衆院議員（49年にも当選）になつた柄沢とし子（夫は松島治重元常任幹部会員、大阪府委員長）がいた。相沢良の生涯は山岸一章の『革命と青春－日本共産党員の群像』に收められている。私も学生時代学んだ1人だ。2つ上の淡谷のり子も相沢家を訪れている。

三陸大津波の救援活動を弾圧
1933年4月6日

虐殺される（亀戸事件）といふ痛ましい出来事があつたことはよく知られている。

この時、川合と同じ南葛労

勵会の佐藤欽次（江刺

参考）。

1933年（昭和8年）3月3日の昭和三陸大津波で多大な犠牲が出た時も、書で記されている（P24参照）。

田原出身）も犠牲になつた

一人であつたことがこの著

てこの時、川合と同じ南葛労

勵会の佐藤欽次（江刺

参考）。

を述べていたことが思い出される。私たちは「柳さん」の愛称で呼んだが、柳さんは戦後の激動期に党の責任者を務め75年に県党最初の「名誉役員」になつてゐる。

③松浦繁蔵（1910～2012年、1947年

以来、旧戸田村、九戸村議通算6期 P157参照）

松浦繁蔵さんと最初に会つたのは、私が党北部地区に赴任した時（82年）だつた。その時72歳の彼は、支部会議に参加して私ら若い人の情勢報告をうなずきながら熱心に聞いてくれた姿が印象的だつた。選挙になれば、私が最初に立候補（83年県議選）した時も随行してくれたし、ビラまきは5000枚を守る。

山宣ひとり孤塁同志山本宣治の最後の演説から
大山郁夫吉
たが私は淋くない
背後には大衆が
支持してくれるから

彼の生涯は著書でも明らかなように、大阪市電車掌の時、共青加盟、入党した直後、3年熱海事件後の検挙で、3年の実刑判決受けた。特高の拷問の様子は「不屈」183号（2008年）に詳しく記されている。「鉛筆攻め」「鉄砲撃ぎ」「鯉の滝上り」など何度も氣絶させられるほどの拷問だつたと述べている。また29年3月、山宣が刺殺される前日、大阪天王寺公会堂での最後の山宣の演説を松浦は聞いたと述べている。「山宣ひとり孤塁を守る」の演説だ。最近の研究では「孤塁」ではなく「我らは赤旗を守る」だつたとの証言が出現。しかし「赤旗」では削除されてしまうので、当時、大山郁夫（労農党委員長）によつて「孤塁」と変え碑文に刻まれたといふのが眞実のようだ（「大阪の日本共産党物語」より）。

戦後、松浦は農地解放の先頭に立ち、47年戸田村議（岩手県で最初の党議員）以来通算6期九戸村議、最後は議会副議長を務めた。後に村を通して「松浦さん勲章をもらつてくれないか」という話があつた時、彼は「天皇からもらう勲章なんかいらない。俺には、この勲章（党章バッジ）がある」と言って断つたことなどを見ても、穏やかな中に不屈性と党派性の強さが感じえていた人だつた。

他に川金さん（川村金一郎、多喜二のルポ役、P98参照）とも接觸があつたことを記しておく。

最後に、治安維持法犠牲者らの人間性、不屈性、党派性は、私ら今を生きる人間にとつても学ぶべきものが大きいにあると痛感している。この著書がその為にも大きな導きとなる事を願つてゐる。 8月30日（丁）

生きることが 反戦平和につながれば
わたしは生きる 這いざろうとも

歌集『わたしは生きる』の作者

八坂スミさんとは

その後転居した埼玉・戸田市では、共働きの家庭が増えて古食卓ひとつがわが家の机にて児らくる午後は拭き清め待つ八坂さんは、渡辺順三さんを囲むアカハタ短歌会にも参加します。その後、沼津の老人ホームに入所しますが、78歳のときに戸田市に戻り一人暮らしを始めます。

その後日本共産党の84年間の歩みには、平和と国民誰もが幸せに生きられる社会を願つて、誠実にたたかい抜いた無数の人々の名が刻み込まれています。

どんな人が、しんぶん赤旗2006年7月15日号の「日本共産党知りたい聞きたい」の記事を転載します。

* * * *

戦前戦後の日本共産党の84年間の歩みには、平和と国民誰もが幸せに生きられる社会を願つて、誠実にたたかい抜いた無数の人々の名が刻み込まれています。

986）もそんな日本共産党員の一人です。この歌は八坂さんは、86年度の多喜二・百合子賞を受賞しました。作品が「今日の社会や政治の在り方に対する、作者のおう盛で積極的な関心が特徴的」であり、政治詠も「作者自身の共産党員としての生き方、格調の高い、平明で澄みとおつた歌風とよく溶けあつて、独特のみずみずしさ、のびやかさがある」と評価されました。授賞式で八坂さんは、「私の歌の土台は、この世話をするなかで日本共産党員の吉田寛の友人だった長村宜平を通じて、河上肇の『貧乏物語』や『赤旗』などにふれ、社会主義に共鳴、活動家をかくまつたりします。疎開していた北海道浦河で終戦をむかえ入党。47年帰京し地域の活動、婦人クラブや「草の実会」会員として女性の運動にも参加していました「八坂スミ」のペネームも新宿区落合八の坂に住んだことに由来します。

八坂さんは、福岡県博多で生まれ、福岡高等女学校を卒業し20歳で結婚。封建的な家制度の中で苦しみ1923年嫁家を出て上京します。早大の学生だった甥の下宿で学生たちの世話をするなかで日本共産党員の吉田寛の友人だった長村宜平を通じて、河上肇の『貧乏物語』や『赤旗』などにふれ、

社会主義に共鳴、活動家をかくまつたりします。疎開していた

北海道浦河で終戦をむかえ入党。47年帰京し地域の活動、婦

人クラブや「草の実会」会員として女性の運動にも参加し

だことに由来します。

95歳の生涯でした。

きょうは堂々と書ける日

「日本共産党」と

九十二年の生き甲斐

党員の誇りとたたかう気迫にあふれた

比例代表選挙が導入され、初めての政党選択選挙で「抜群の躍進」を

したときはー

身に沁（し）む

一票がある

（1982年）

「戦争の足跡を追って」北上・和賀の15年戦争
映画上映会は1月15日に延期されました。
先月号でお知らせしましたが、コロナ感染が増加し、岩手県独自の緊急事態宣言が出された為延期となりました。

「新しき明日をめざして」は 「こうして誕生した」 (牛山靖夫記)

第7回

いま思えば、私にとつて治安維持法犠牲者の「名簿化」の第1号は佐々木周平さんという事になります。

▼松浦繁藏さん

(五) 二度と聞くことの出来ない犠牲者たちの証言
同盟が犠牲者たちから直接体験を聞いたり、手紙のやりとりをしたり遺族から聞くことが出来たのは、20人ほどにすぎません。そうしたなかで、いくつかの思い出を報告します。



▼佐々木周平さん

同盟ができる前年の1990年6月、『生涯を党とともに一不屈の日本共産党員たち』が出版されました。「月間学習」に連載された14人についてまとめたのですが、私が書いた「佐々木周平さん」反帝同盟以来の反戦・平和運動家も入っています。

佐々木さん(*P114)は戦前陸前高田の矢作で反帝同盟をつくり、弾圧されています。戦後は長い間東京は出稼ぎに出していましたが、原水禁運動の平和行進やベトナム侵略反対の10・21集会には参加していたそうです。

戦前の活動について問い合わせると、晩年は病気に苦しみ、八坂スマさんの歌(生きることが反戦平和につながれば私は生きる)が生きる支えだと手紙にありました。

私は参院選の予定候補だった当時、金野剛氣仙地区委員長のはからいで矢作の佐々木さんを訪ねたことがあります。不自由な体だったのに両手を広げて仁王立ちになつて迎えてくれました。(違うこともできなくなつたが)手にはまだ(平和を守る)一票がある)という八坂さんのもう一つの歌のとおり、佐々木さんの最後の一票は1986年7月の衆参同日選挙でした。

②その後、岩手町でも松浦さんの話を聞く会がありました。このときはこれまでの話に加えて、松浦さんが受けた拷問について詳しく話してほしいと要請しました。こうして『新しき明日』にあるように特高警察による残酷な拷問についての証言を得たのでした。

